

## 特発性血小板減少性紫斑病合併妊娠における新生児血小板減少症発症の危険因子同定に関する研究

### ・はじめに

特発性血小板減少性紫斑病は生殖年齢女性に好発する疾患で、その合併妊娠の管理は産科臨床において重要です。本疾患では自己抗体が胎盤を通過することによると考えられる胎児及び新生児の血小板減少症が1つの大きな問題となります。血小板減少が高度であれば生直後からガンマグロブリン投与や血小板輸血を要することがあり、また、新生児脳出血は児の生命予後及び発達予後を不良とする重篤な合併症です。

今回、私たちは特発性血小板減少性紫斑病の妊婦さんから出生した赤ちゃんの情報を診療録から調べ、血小板減少を呈した赤ちゃんとは呈さなかった赤ちゃんについて、母体の治療歴や妊娠経過、血小板数などを比較して、出生前に新生児血小板減少のリスクのある児を抽出することが可能かどうか検討します。また母児間の血小板数の相関、及び兄弟間での血小板数の相関についても調べ、これらの意義についても考察します。

### ・対象

九州大学病院産科婦人科において2001年1月1日から2013年12月31日までに出産された血小板減少性紫斑病合併の女性は49名いらっしゃいました。おひとりが複数回当院で出産されたケースもあり、合計の66妊娠をこの研究の対象と致します。

対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

### ・研究内容

診療録にあるデータを後方視的に集積し、統計解析を行います。

この研究を行うことで患者さんに検体採取などの余分な負担が生じることはありません。

### ・個人情報の管理について

個人情報漏洩を防ぐため、個人を特定できる情報を削除し、データのデジタル化、データファイルの暗号化などの厳格な対策を取り、第三者が個人情報を閲覧することができないようにしております。

また、本研究の実施過程及びその結果の公表（学会や論文等）の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

### ・研究期間

研究を行う期間は承認日より平成 28 年 3 月 31 日までを考えております。

### ・医学上の貢献

本研究により被験者となった患者さんが直接受けることができる利益はありませんが、研究成果によって発性血小板減少性紫斑病合併妊娠における新生児血小板減少症のリスクが評価できるようになれば、適切な分娩方法や分娩場所(新生児集中治療室併設の施設が望ましいか否か)の決定が可能となり、多くの赤ちゃんの治療と健康に貢献できる可能性が高いと考えます。

### ・研究機関

九州大学病院 産科婦人科 総合周産期母子医療センター

教授 加藤聖子

講師 福嶋恒太郎

助教 日高庸博

連絡先：〒812-8582

福岡市東区馬出 3-1-1

Tel : 092-642-5395

担当者：日高庸博